

実践報告

思いを表現へとつなげる図画工作科の授業づくり — 小学校第2学年の授業を通して —

中野 和幸*

A lesson plan of Art and Handicraft to Connect a child's
Imagination with Expression:
Through a Class of an Elementary School Second Graders

Kazuyuki NAKANO*

【要約】

題材を通して児童の思いが表現されるように、習得・活用・探究の視点をもって、各段階における教師の具体的な指導の在り方を検討し、小学校第2学年の授業実践を通して指導の有効性の検証を児童の姿を通して行った。思い付いたことを試すことができる場や展開の工夫、ICTの利活用を行うことで、児童は基礎的・基本的な知識・技能を習得・活用しながら、思いを表現することができた。

【キーワード】

児童の思い、習得・活用・探究、ICTの利活用

1 主題設定の理由

国立教育政策研究所から出された『小学校学習指導要領実施状況調査教科別分析と改善点(図画工作)』（平成27年2月）によると、主に表現の始まりにおける発想や構想の能力である、想像したことから表したいことを見付けて表すことのできた児童が、調査をした6年生のうち79.7%とあり、課題として挙げられている。改善点として、児童の活動のプロセスに目を向け、児童が感性を十分に働かせながら、表したいことを思い付くことができるようにすることや、発想や構想の能力と創造的な技能が共に高まるような指導を充実すること等に留意した学習指導の充実が挙げられている。また、学習指導要領解説図画工作科編には、表現における具体的な活動の姿は、児童一人一人の表したい思いに応じて多様であり、指導上の留意点として、学習活動や表現方法などに幅をもたせることとある。これらのことから、表現の始めの段階から表現の最後まで、児童一人一人の思いが表現されるための授業づくりが求められているといえる。

児童は、材料をもとに表したいことを思い付いたり、自分の思いをもとに表し方を考えて表現したりする。いずれも児童の思いが表現への原動力である。感性を働かせながら、個々の児童が思いもち、もった思いを持続させたり高めたりしながら表現へとつなげ、自らつくり出す喜びを味わわせるために、教師の具体的な支援の在り方を探る必要がある。

そこで、児童が思いをもち、進んで自分の思いを表そうと、形や色を用いて表現することができるような図画工作科の授業を目指して、現行指導要領より求められている習得・活用・探究の視点から教師の具体的な支援の在り方を検討し、低学年の実践を通して授業改善を図ろうと、本主題及び副題を設定した。

2 研究の目的

本研究では、題材を通して児童の思いを表現につなげるために、習得・活用・探究の視点をもって、導入・展開・終末の各段階における教師の具体的な指導の在り方の検討を行い、小学校第2学年の授業実践において、その指導の有効性を検証し、授業改善を図る。

3 教師の具体的な指導の在り方についての理論研究

(1) 児童の思いについて

児童の思いについて、栗城(2008)は、思いとは表現したい意欲であり、「題材と出会う段階」、「構想を練る段階」、「表す段階」、「響き合う(鑑賞)段階」の活動の中で、児童の思いと表現技法を関連させることの大切さを述べている。この考えを基に、本研究では、思いを「主体的な表現活動への意欲及びイメージ」とし、導入・展開・終末の3つの段階にとらえ直して思いをつなぐ姿を明らかにする。具体的には、導入(題材と出会う段階)において、児童が表したい思いをもち、展開(構想を練る・表す段階)において、活動しながら思いの実現に向かい、終末(響き合う・振り返る段階)において、思いの確認とさらなる表現へのイメージをもつ姿である。

(2) 図画工作科における習得・活用・探究について

平成20年度版学習指導要領の改訂のポイントとして、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することが示された。また、基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習活動、これらの活用を図る学習活動及び総合的な学習の時間を中心とした探究活動といった学習の流れを重視することが求められた。奥村(2007)は、図画工作科においても「習得、活用、探究という視点をもつことで、学習過程を明確にし、指導を改善することができる」と述べている。探究的な活動が多い図画工作科において、技能や技法の習得と活用の視点をもつことで指導を具体的に考えることができるのである。ただし、習得→活用→探究の一方通行ではなく、一体的なプロセスとしてとらえる必要がある。本研究では、思いに合わせて児童が知識や技能を活用する姿を追うことで、指導の有効性の検証を行う。

(3) 各段階における教師の具体的な手立て

導入・展開・終末での教師の具体的な手立てを、以下のように整理した。

ア 表したい思いをもつ導入

- (ア) 題材や新たな技法に興味をもたせるためのICTの利活用
- (イ) 材料・技法に触れ、試すことができる場・時間の設定

イ 思いの実現に向かう展開

- (ア) 試しながら思いを膨らませることができる場・時間の保障
- (イ) 思いを持続し、高める言葉かけ
- (ウ) 交流を促すICTの利活用

ウ 思いの確認とさらなる表現へのイメージをもつ終末

- (ア) お互いの活動を確認し、共有するための交流場面の設定
- (イ) 活動の変遷をたどる振り返り
- (ウ) 新たな造形活動へと向かう言葉かけ

以上のことを図1で示す。矢印は、題材における手立てが、前時や次時とつながっていることを示しており、児童の思いが繰り返しながら連続することを意味している。

また、探究型のめあてのもと、技法の習得・活用が一体となって行われている姿を、各段階でとらえていく。

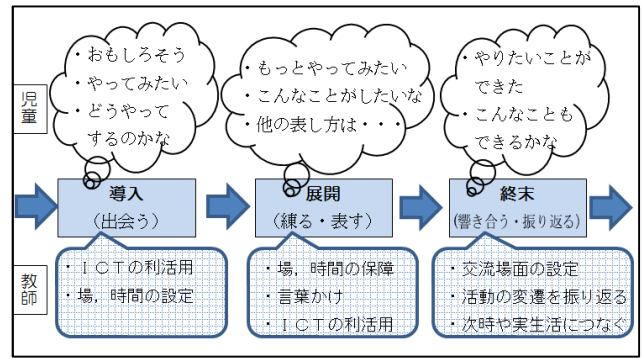


図1 各段階での児童の思いと教師の具体的な手立て

4 授業の実際

授業実践「こすって うつして」 第2学年2組 34名 2016年11月（1時間）教室・校内

(1) 題材について

本題材は、こすり出し（フロッターージュ）の技法を試す中で、自分のイメージをもちながら思い付いたことを表す造形活動である。「お気に入りの形や模様を見付けよう」という探究型のめあてに向かって、身の回りの物の凹凸や形を写し取る活動を楽しむ中で、生まれた形や模様、色の面白さを感じたり、こすり出しの技法を用いて思いを表したりする姿を目指す。また、写してできる形や模様の面白さを十分に味わい、思い付いたことを表すために必要な材料や用具等を主体的に選んだり、技法を活用したりする力を身に付けさせることをねらった題材である。

(2) 児童の実態について

本学級の児童は、進んで材料などにかかわって、形や色などから自分のイメージをもって造形活動を行うことができる。写し取る経験については、キャラクターなどの上に紙を置いて、透かして形を写し取ったことがある児童は多いが、十円玉等の表面の形をこすり出した経験のある児童は少ない。また、これまでにデカルコマニーやにじみ、たらし、バチック（はじき絵）の技法を体験し、偶然から生まれる形や色の面白さを味わっている。しかし、他の題材において、これらの技法を用いて表す児童は少ない。

(3) 導入・展開・終末ごとの教師の手立てと児童の様子

ア 表したい思いをもつ導入

(ア) 題材や新たな技法に興味をもたせるためのICTの利活用

大きな画面で映し出せる点、イメージが残像として残る点を生かして、電子黒板を用いた導入を行った。興味をもたせるために、「こすり出し」の技法を用いて表した形や模様を電子黒板に提示しながら、形や色の面白さや美しさに気付くよう、児童に思ったことを発言するよう促した。自作動画でこすり出す様子を提示し、視覚的に捉えられるようにした。

児童は、「形が並んでいて綺麗」「海みたいな感じがする」と発言し、大きく映し出された形や模様に興味をもっていた。こすり出しの技法を動画で流すと、一緒に手を動かしながら方法を確認する姿が見られた（図2）。



図2 技法を確認する児童の様子

(イ) 材料・技法に触れ、試すことができる場・時間の設定

興味を引き、「やってみたい」という思いを児童にもたせた後、実際に活動に行った。すぐに活動できるよう、身近な物（クリップ・輪ゴム・波型段ボール）と紙を班ごとに用意し、こすり出しの技法を試す時間を設け、最低限必要な技術である「紙を押さえる」「紙の上からこすり出す」の2点ができているかを確認した。児童は、一斉に行うことで、友達の活動を見ながらこ

すり出しを試していた(図3)。シャシャシャの音とともに、表れた形や模様は歓声を上げ、こすり出せたことに喜びを感じることができた。こすり出せた児童は他の材料や場へと活動を広げて試した。

イ 思いの実現に向かう展開

(ア) 試しながら思いを膨らませることができる場・時間の保障

児童が自分の方法で思いのままに表す過程を楽しめるようにするために、試しの時間とイメージを確認し表す時間と区別せず、活動時間や材料の制限を極力無くした。また、繰り返し試したり、色を選択したりしながら発想を広げるために、用紙は、PPC用紙(白、青、桃、黄緑色)、わら半紙をA6サイズで用意し、画材は、鉛筆、クーピー、クレヨンから使いたいものを使わせた。活動場所の限定も行わず、外での活動も認めた。児童一人一人が思いを試し、眺めては別の方法を試したり新たな場所に向かったりと、行きつ戻りつしながら、お気に入りの形や模様を見つけ出そうと活動を展開した。

(イ) 思いを持続し、高める言葉かけ

児童の発言や活動を価値付ける言葉かけと、児童の思いを引き出す言葉かけの2点を意識して言葉かけを行った。写し取るものを積極的に探したり、用紙や色、こすり方等を変えたりしている姿を価値付け、「お気に入りの見つかった?」「どれが気に入った?」とめあてに基づいた言葉かけである。その瞬間の姿だけでなく、「色を変えてみたんだね」「今度は外で探してみるんだね」と、活動や思いの変化を含めた言葉かけを行った。

(ウ) 交流を促すICTの利活用

電子黒板には活動場所やこすり出す対象のヒントとなるように、タブレット端末で撮影した画像を、タブレット端末にはこすり出す方法を動画で提示した(図4)。表し方や形や色の面白さに気付き、お気に入りの形や模様を見付けることができるように、似た活動を行っている児童に動画を見せたりしながら、児童同士の交流を促した。

ウ 思いの確認とさらなる表現へのイメージをもつ終末

(ア) お互いの活動を確認し、共有するための交流場面の設定

お互いの活動や思いに触れることができるよう、気に入った形や模様を黒板に貼り見ることができるようにした(図5)。他者と比べることで、自分の思いを確認したり、新たな思いをもったりすることをねらった。似た活動をしている児童に気付いたり、新たな方法のヒントとしたりしていた。

(イ) 活動の変遷をたどる振り返り

自分の活動を振り返るために、活動と作品の変遷を、時間軸に沿って電子黒板に提示した。また、自分の思いを確かなものにするために、自分が気に入った形や模様こすり出した紙を順番に並べ、その変化をたどらせた(図6)。自分たちの活動や作品の変遷を見ることで、思いを表せた喜びだけで

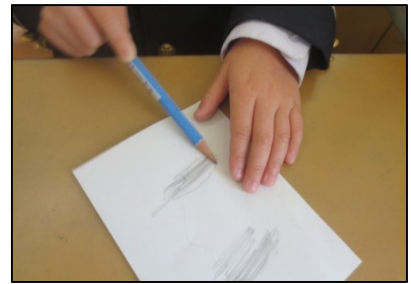


図3 技法を試す児童

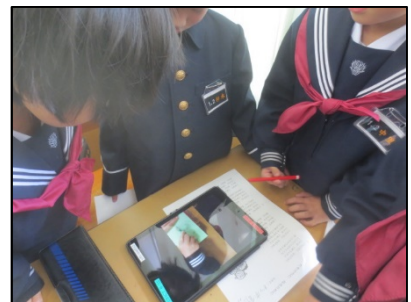


図4 こすり出す方法を確認



図5 作品を介した交流



図6 作品の変化をたどる様子

なく、自分が表そうとした思いについても振り返ることができた。

(ウ) 新たな造形活動へと向かう言葉かけ

活動を通して得た思いを、次時や他の表現へと向かうように、「どんなことがしたい？」と尋ねた。「違う場所でやってみたい」「大きな紙にこすり出したい」「できた形を切り取って絵にしたい」との答えから、新たな造形活動への思いをもったことが分かる。授業後もこすり出しを行おうとする姿からは、こすり出しの技法が、子どもたちの表現方法の一つとして定着したと言える。

(4) 考察

A児の様相をもとに、技法を習得・活用しながら思いを表そうとする姿を検証することとする。

こすり出しの技法を知ったA児は、物差しをこすり出そうと試みた(図7)。描画材はクーピーを選択し、鉛筆の握り方で立てたまま動かしている。いくつかの穴はこすり出せたが、思うように形が表れなかった。いくつか試すが、なかなか思い通りにこすり出せず、お気に入りの模様や形に出会えない。場所を変えて、いろいろなところを探すうちに、テラスのマットをこすり出そうとした。地面にあり、凹凸が大きいので、鉛筆の握り方では思うようにいかない。そこで、握り方を変え、寝かせてこすり出すようにすると、はっきり形をこすり出せることに気づき、紙を動かしながら繰り返し行った(図8)。すると重ねてこすり出せることや、こする方向で表れ方が違うことに気づき、他の場所でも一度こすり出した上に向きを変えてこすり出していた。これは、こすり出しの技法を、自分の思いに合わせて活用している姿である。終末において、A児が並べた作品が図9である。実際はもっと多く試していたが、A児のお気に入りには2枚であった。「初めは、形が綺麗に出ると嬉しかったけど、いろいろやってみると自分で模様がつくることが分かって、いろいろやってみた。」と振り返ることができた。



図7 技法を試すA児



図8 新たな技能を習得したA児



図9 A児のお気に入り

A児の思いは、「こすり出して面白そう」→「うまくこすり出せなかった。別のところでやってみよう」→「うまくできたぞ。もっと試してみよう」→「重ねる方法もあるな。〇〇もできそうだ」…と変化している。A児に限らず、多くの児童が活動を通して、こすり出すものに合わせて持ち方やこすり方を変えること、こする力加減で形や模様が出たり出なかつたりすること、向きで形や模様が変わること、凹凸の大きいものや、やわらかいものはこすり出しに向いていないこと等を感じ取っており、技法を自分のものとして習得・活用することができた。これは、導入において、すぐに活動できるように、形や模様を写し取ることができるものを用意し、机上で一斉にこすり出しを試す時間を設けたことや、時間や場所を区切らず、思い付いたことを試すことができるような展開や場の工夫が一因にあると思われる。児童は、知る→試す→自ら見付けるといったスモールステップを経ながら、自分の思いを表そうと活動を進めることができた。

また、電子黒板を用いた導入では、短い時間で提示を行うことができ、自作動画による提示では、無駄な動作や情報を省き、こすり出す行程のみに焦点をあてることができた。こすり出す際の音を全員が聞くことで、視覚と聴覚からこすり出しに興味をもたせることができた。また電子黒板とタ

ブレット端末の特徴を生かして、静止画による活動場所（対象）のヒントと動画によるこすり出し方の工夫を分けて提示することができ、児童は何を参考にすればよいのかを明確にもって情報を得ることができた。このことから、ICTの活用は、児童の思いを表現へつなげたり、児童同士の交流を促したりするのに有効であったといえる。

5 まとめ

(1) 成果

- 探究型のめあてに向かって、思い付いたことを試すことができる場や展開の工夫、ICTの効果的な活用を教師が行うことで、児童は基礎的・基本的な知識・技能を習得・活用しながら、思いを表現することができた。
- 題材を通して児童の思いが表現されるように、習得・活用・探究の視点をもって、各段階における教師の具体的な指導の在り方を検討することで、授業でみるべき児童の姿が明確になり、授業改善につなげることができた。
- 題材の導入及び技法習得場面や展開場面などでICTを効果的に活用することで、児童の思いを表現へつなげたり、児童同士の活動をつないだりすることができた。

(2) 課題

- 児童の思いや活動をより具体的にとらえるためには、児童がこれまでに身に付けた知識・技能を活用している姿に着目する必要がある。個々の児童の姿を適切にとらえることができるよう、各題材において発揮される児童の資質・能力の整理を行う。
- 低・中・高学年のつながりや幼保・小学校・中学校と校種のつながりを意識して児童の思いを整理するとともに、思いが表現される際に働く資質・能力について整理し、その育成を目指した授業づくりに引き続き取り組む。

【引用文献】

- ・栗城敦志：「つたえあい」意欲をはぐくむ、響き合う図画工作科の指導. pp. 26 - 31, 初等教育資料 11月号, 2008
- ・奥村高明：子どもの習得、活用、探究を重視した学習指導の改善. pp. 50 - 61, 初等教育資料 4月号, 2007

【参考文献】

- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説総則編. 東洋館出版社
- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説図画工作編. 日本文教出版株式会社
- ・文部科学省教育課程課・幼児教育課編（2007）初等教育資料（820）, 東洋館出版社

【参考URL】

- ・国立教育政策研究所『小学校学習指導要領実施状況調査教科別分析と改善点(図画工作)』平成27年 2月 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/index.htm (2016年8月10日アクセス)